

# 東井義雄のいのちの言葉を道徳教育に活用する試みの研究

齋藤 義雄

東井義雄は、自らを生活綴方教師と呼び、学習の理論を「生活の論理」と「教科の論理」とした。教師である東井には、仏教の僧侶という一面もある。学校では宗教教育は行わないように配慮したが、生き方に関するいのちの言葉を発した。この東井のいのちの言葉は、道徳教育の場としての要である「特別の教科道徳」でも、活用が可能であると考えられる。

東井の道徳教育の考え方は、徳目主義の道徳には否定的だったことから、本研究では読み物資料としての活用や徳目に応じた教師の説話として活用の検討は想定しなかった。東井のいのちの言葉は、後世に残すべき価値があると考え、東井のいのちの言葉の活用を試みた。東井のいのちの言葉の中から選出し、試案として、大学の授業で教員免許の取得を目指す学生に質問紙調査を実施した。読んだ印象に基づく量的調査に加え、その理由を調べることによって質的調査を実施した。本研究は、東井のいのちの言葉が「特別の教科道徳」を要とした道徳教育に活用できるかを検討した。

キーワード：東井義雄 特別の教科道徳 東井のいのちの言葉

## 1. 研究の目的

東井義雄は、自らを生活綴方教師と呼んだ。また、学習理論を「生活の論理」と「教科の論理」と呼んだ。「生活の論理」では、生活綴方に力を注いだ。「教科の論理」では生活綴方的教育方法を行った。一方で、教師である東井には僧侶の一面がある。在職中は宗教教育にならぬように配慮し、人としての生き方について普遍的な話を語った。東井による「いのち」の思想、「いのち」の教育に基づく言葉は、これからの道徳教育で採り上げる価値がある言葉が多い。東井の著書による「いのち」の思想、「いのち」の教育という記述はある。東井による東井自身の言葉に対する名称はないが、米田・西村が東井の言葉を編集した文献でいのちの言葉と表現している<sup>1)</sup>。本研究でも米田・西村と同様にいのちの言葉と表現するが、言葉の抜粋は筆者が行う。その東井のいのちの言葉

を道徳教育に活用することを試みるのが本研究の目的である。

なお、東井は生活綴方において、子どもに多くの道徳的な示唆を与えた。東井が生活綴方に担任として直接関わっていた当時は道徳の時間は特設されていなかった。現在の「特別の教科道徳」は、学習指導要領で教科化されたものである。東井は、生活綴方等を通して道徳教育を行っており、徳目主義の道徳の時間には否定的であった。したがって、本研究では、現在の「特別の教科道徳」で、徳目主義に基づく読み物資料や徳目に基づいた教師の説話として活用することは想定しなかった。徳目主義の影響が大きいと思われる読み物資料や教師の説話を除いたことにより、徳目主義の影響が小さい場面で東井のいのちの言葉を扱うこととなる。何より東井のいのちの言葉は、後世に伝える価値があると考えられる。特別活動や朝の会、帰りの会での活用が考えられる。道徳教育の要である「特別の教科道徳」は、全体的には徳目主義であ

東京家政学院大学現代生活学部児童学科

るが、徳目主義の影響を小さく抑えることができる場面に限定することで、東井の言葉の活用を図ることができると考えた。

東井の言葉の活用に関する研究を通して、さらに「特別の教科道徳」の課題に迫りたい。

- ・「特別の教科道徳」のカリキュラム上の妥当性
- ・検定教科書以外の教材として活用の可能性
- ・道徳性・人間性を評価することの是非

これらの「特別の教科道徳」がかかえる様々な課題を検討し、東井のいのちの言葉の活用の課題を明確にしたい。

## 2. 研究の方法

東井義雄のいのちの言葉や生き方に関する言葉の例をとりあげ、道徳教育への生かし方について検討する。

評価の基準については、自然科学のような明確な評価基準をつくることは難しいが、仮説として以下のような視点に整理した。

- ①子どもの生活環境との違いが少ない。
- ②子どもが理解できる内容である。

東井の時代と現代との子どもの生活環境に違いが大きくないか、子どもが生きる社会環境等の違いを踏まえて、理解できる内容であるか、等を視点として検討する。各視点に基づき、道徳の授業を実際に行ってきた筆者の実践者としての経験に照らして評価することになる。筆者の経験だけでは主観的だと思われがちだが、道徳の研究授業、研究会に参加して得た知見を反映させることで、より妥当性が高い検討を行いたい。

本来なら、小・中学生を対象に授業で活用すべきところだが、今回はその前段階として大学生を対象に調査した。

筆者が選んだ東井のいのちの言葉について、H大学の『教育課程論』で、東井の実践をとりあげた際に、リフレクションペーパーとして約450名の学生に質問紙調査を行った結果を整理し、考察する。さらに、東京家政学院大学の『教育課程論』で、約60名の学生に対して、同様の調査を実施した。合計人数で約500名となるので、ある程度参考となる結果が得られたものと思われる。

東京家政学院大学の授業は遠隔授業であった点

が、H大学とは条件が異なる。対面授業で実施したH大学と遠隔授業で実施した東京家政学院大学の比較を試み、授業形態との関連についても考察する。

## 3. 先行研究の整理

### 3-1 東井義雄の道徳教育に関する先行研究

東井義雄の研究は長年行われてきた。時代背景が異なる場合、参考にならないことも少なくない。東井の実践と最近の教育課題と結び付けているのは豊田ひさきである。豊田は、東井の実践と最近のESDとの関連<sup>2)</sup>や学習指導要領の「主体的・対話的で深い学び」との関連に注目している<sup>3)</sup>。豊田の記述の中心は東井の教科指導である。従来の方の論文も生活綴方や教科指導に関して語られることが中心だった。本研究では、東井の研究でこれまであまり光が当てられてこなかった道徳教育に注目する。

東井に関しては、生活綴方や教科の論理、通信簿改革等に関して語られてきている通り、教科指導の研究は多いが、道徳教育に関する論述は少ない。その要因の一つは、東井が学習指導要領上の「道徳の時間」の教育実践を行っていないことであると推測できる。その理由は、1912(明治45)年生まれで、1991(平成3)年に没した東井は、1958(昭和33)年10月1日の学習指導要領の改訂で「道徳の時間」の特設が告示・施行された当時は45歳であった。翌年の1959(昭和34)年には、相田小学校の校長に就任しているので、すでに管理職だったと推定され、学級担任として「道徳の時間」の教育実践はほぼなかったと推測される。ただし、生活綴方的教育方法で、学習帳の指導を行っており、個々の子どもには日常的に生き方の指導を重ねてきた。また、『東井義雄著作集』によれば、東井の記述に道徳教育が出てくるのは、1958(昭和33)年5月である。雑誌『児童心理』において「生活綴方と道徳教育」を著わしている。「徳目の教説からスタートする道徳教育を、私は信用する気になれない。」「道徳的な観念は形成することが出来るかもしれない。根なし草の観念など、ひとたまりもなくふっとんでしまう。」「生活認識の力と実践の力は、説教以前、善悪以前の、

なまの生活実現を媒介してのみ、育てられるのではないか、という気がする。」「生活綴方の問題にする生活は、単に道徳的生活、あるいは反道徳的生活にとどまらない。道徳以前、善悪以前の深さと広がりにおいて生活を問題にする。」「生活綴方は、虚偽を憎悪する。たとい実践的には道徳的善行為であっても、そこに偽りがあるなら、容赦なくその仮面をひっぺがす。」「しかし、考えてみると生活綴方の構え方なり、方法なりこそ、ゆるぎのないまことの道徳教育の行き方だとも言えるようだ。」と述べている<sup>4)</sup>。1969(昭和44)年には、校長の立場から、「道徳教育」に言及している。校長となって、「道徳教育は、子どもの心のひだにまでふれていく力をもたない教師にはできないものではない。それは、子どもという人間の生き方あり方をゆり動かし、より値打ちのある生き方や人間のあり方を、子ども自体に、本気で求めずにおれなくしてやる仕事であるからである。」と記している<sup>5)</sup>。東井の著書『村を育てる学力』で分かるとおり、東井の主な興味・関心は生活綴方、教科指導にあったと思われる。僧侶であったことから、道徳教育が宗教教育とならないように配慮した。退職後は、僧侶としてこころの教えやいのちの教えに関する記述は増えた。

以上のことから、管見の限り、東井本人や東井の学習指導要領上の「道徳の時間」に関する論文は多くない。

### 3-2 筆者の東井義雄に関する研究

本研究に至るまで、筆者は東井義雄の教科指導、総合的な学習の時間の指導等について次のような論文をまとめた。東井義雄の「つまずき」を生かしたカリキュラムマネジメント・ブルームの完全習得学習(マスタリーラーニング)と比較して<sup>6)</sup>、東井義雄の「つまずき」を生かす指導法の研究—斎藤喜博の「つまずき」への対応と比較して<sup>7)</sup>、東井義雄の「教科の論理」における指導法に関する研究—主体的・対話的で深い学びの観点から<sup>8)</sup>、東井義雄における野外文化教育の指導法に関する研究—主体的・対話的で深い学びの観点から<sup>9)</sup>、反省的实践家 東井義雄<sup>10)</sup> 等である。これらを通して、東井義雄の実践について検討してきた。

本研究は、これらの東井義雄研究の一環として、東井義雄の道徳教育に関して焦点を当てたものである。

### 4. 特別の教科道徳のカリキュラムの妥当性

2017(平成29)年度公示の学習指導要領では、すでに移行期間として2015年から、一部または全部に先行実施されている「特別の教科道徳」が、引き続き実施されることが確認された。なお、完全実施は、小学校、特別支援学校は2018年、中学校は2019年であった。実際には、2017年の時点で、多くの学校ですでに先行実施されていた。学習指導要領では、「特別の教科道徳」の目標として、以下のように記されている<sup>11)</sup>。

「第1章総則の第1の2の(2)に示す道徳教育の目標に基づき、よりよく生きるための基礎となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。」

教科化させたことは、道徳教育の重要性を一層増加させることを意図した。

折出によれば、そもそも「特別の教科道徳」は、カリキュラム上は、非学問的だという<sup>12)</sup>。

カリキュラム論から考えると、カリキュラムには内容であるスコープと順序であるシーケンスがあるものである。道徳の時間は、内容項目を設定し、学年というより低学年・中学年・高学年程度の子どもの発達段階を考慮した学ぶ順序を設定したものである。したがって、他の教科と同じようなカリキュラムの編成理論で考えようとするとう無理が生じる。

今回の教科化は、いじめ問題などが社会問題となったという背景から、道徳教育にさらに力を入れると言う目的で導入された。強化するだけなら、必ずしも教科化する必要性はない。強化につながるという論理で教科化されたが、教科書が作成され、子どもの道徳性を評価することになり、管理が一層強化された面がある。

ただ、普通の教科と異なるのは、知・徳・体の徳を担うのが道徳であり、知を担う他の教科とは

そもそも異なる。それを一様に教科と呼ぶには無理がある。菊地によると押谷由夫は、各教科を超える教科（スーパー教科）である「特別の教科」としたと説明したのである<sup>13)</sup>。

## 5. 教材開発の筆者の視点

いのちの教育、こころの教育を重視し、多くの示唆を残した東井義雄の実践を詳しく検討する。「特別の教科道徳」での活用には、次の3つの場面が考えられる。

- 1) 読み物資料としての活用
- 2) 教師の説話としての活用
- 3) いのちの言葉の活用

1) は、授業の主たる読み物資料として、授業の45分間で活用する場合である。具体的には、徳目主義に基づく内容項目にしたがって検討する<sup>14)</sup>。文部科学省も、「検定教科書が使用される場合も、道徳教育の特性にかんがみ、地域や学校の実態を踏まえて、教育委員会・学校や民間等の作成する多様で魅力的な教材が併せて活用されることが重要」としている。このことから、主とする教材は検定教科書であるとしても、それに併せて教材として活用することは可能である。

2) は、授業のまとめ等で教師の説話として活用する場合である。検定教科書の読み物資料を使ったとしても、まとめの段階等で、5分～10分程度の教師の説話として、関連する話題について取りあげることは、子どものこころの成長の助けになる。話題として、東井の言葉を活用することは可能である。

3) は、東井のいのちの言葉を、説話等的一种として5～10分程度の活用を想定している。検討する方法として、質問紙調査を行い、教材化の可能性についての具体的な知見を得る。なお、一般的には教材化の順序として、1)、2)、3)の順に検討することになる。本研究では、東井は生活綴方の中で道徳教育を行っており、徳目主義には反対だったことから、1)と2)は検討の対象から外すことにした。したがって、3)のいのちの言葉を取り入れる研究を行った。

## 6. 東井義雄のいのちの言葉の試案での活用

### 6-1 いのちの言葉の説明事例

(1) 一番はもちろん尊い しかし 一番より尊い  
ビリだってある

#### ① 東井の説明

堂々とビリを走りなさい<sup>15)</sup>。

東井は、先生になりたくて師範学校に行った。入部したのは、マラソン部であった。マラソン部では、4年間、東井は常にビリだったという。

「僕がビリを独占しているせいで、他の部員は全員、ビリの悲しみを味わわずにすんでいる。ほくも一つの役割を果たしていると感じたのです。」先生になったら、走れない子、泳げない子、勉強ができない子の悲しみのわかる先生になろう。そういう子が、よろこんで学校に来てくれるような先生になろうと、考え続けた。

これらのことがあって、「日本一立派なビリであることができるように、こころがけてほしい」と東井はいう。

#### ② 筆者の考察

東井から児童への生活綴方の助言としては、「一番は尊い しかし一番より尊いビリだってある」ということになる。誰もが同一の価値観で1位になれるわけではなく、多様な価値観で唯一無二の存在として生きていく価値を自覚させることが重要となる。東井が、師範学校時代にマラソン部で、常にビリだったことを例にとり、ビリにも価値があると説いている。マラソン部という集団ではビリだったかもしれないが、部員ではない一般の学生よりは早かったと思われる。

#### ③ 活用上の課題

東井の場合、マラソン部ではビリだったろうが、一般の学生よりは早かったと思われる。このように教師自身の失敗談やビリだった事例を伝える。児童に身近であるということで失敗談を扱うが、できれば、その失敗を乗り越え、あるいは失敗を生かし、成功した事例を扱いたい。それは、失敗は一時的なものであり、挽回が可能であるということに気づかせることが重要であるからである。担任自身の同様の失敗談が有効であろう。誰しも失敗談の一つや二つはもっている。しかし、子どもの前では、なかなか話せないものである。自分

の弱さや苦手なことを正直に話せるかどうか、重要になってくる。

筆者自身も、若い時は失敗談をなかなか話せなかった。児童の前で、自分の弱さを示すことに抵抗があった。おそらく、そのような教師も少なくないであろう。そのころは、「教師は背中で教える」と考えており、模範を示さなければならぬと考えていたように思う。率先垂範は理想であるが、その反面、子どもの共感を得ることも重要となる。その意味で、東井のピリの話のをうまく自分自身のものとして話すといふ。この話は時代が異なるが、現代の児童にも理解できる話だと思われる。

ここで配慮すべきは、上位の子どもであろう。一番の子どもが、ピリは一番より尊いと受け止め、一番を目指さなくなることも考えられるが、稀だとは思われる。しかし、一番に満足してしまっただけでよいのかと指導することは重要である。自分をさらに伸ばすという視点から指導することを忘れてはならない。

(2) ほんものは続く 続けるとほんものになる<sup>16)</sup>

### ① 東井の説明

何か簡単なことでいいから、ここまで続けることができたということを持っていただきたい。

ある市議会議員の話を用いた。ある高齢者に話を聞いた。

「あなのとこのお孫さん。就職してしまって寂しいでしょう。」

「はい、寂しいです。あの孫が家にいる間、私の寝床の世話をずっと続けてくれました。それがいなくなって寂しいですが、就職先で、皆さんから、かわいがっていただいている便りをくれるのが楽しみです。」

という話をした。

どんなつまらんことでもよろしいから、ここまで続けたという自慢話になるような自慢を育てていただきたい。

### ② 筆者の考察

東井の話は、続けた結果ほんものになったという事例ではない。祖母の床の世話をしていた孫が、介護の仕事のプロになったというのであれば、この言葉の証明になるが、この事例は、立証として

は弱いと思われる。

東井は普通でよいと考えている。祖母の床の世話をするような優しい孫だから、人間性が磨かれ、就職先でもかわいがられるなど、人間関係が良好になったという間接的な成功例である。東井は、それで十分と考えているのであろう。直接的な成果を求めるのではなく、間接的でもいいから、人として成長した、それで十分な「ほんもの」と捉えているようである。

普通の子の普通の幸せの事例で十分だと考えていると思われる。

東井のとらえ方は、寛大である。

事例の説明としては、普通の話でよいのだと思う。子どもの日常、身の回りにある出来事での継続。それこそが東井が求めていたものであろう。どんな些細なことでも、継続すれば、「自慢」という自信になる。自己肯定感も向上するであろう。諦めない習慣や粘り強さも身につく。つまりは、人格の完成に近づいていくことを、東井はわかっていたのだらう。味わいの深い言葉である。

### ③ 活用上の課題

東井の場合は、祖母の世話することからほんもの（プロ）となるならば、介護士等の職業が想起されるが、そこまで直接的なほんものを求めている。職業に直結しない間接的なほんものでもよいと考えられる。東井にとっては、人としての成長があれば、それで十分ほんものであった。しかし、教師が、もっと直接的な事例があれば、それに差し替えて問題ないと思われる。東井のように、普通でよいと考えるのは、子どもには分かりづらい。現代の子どもが実感できる事例で説明することは、特に問題はないと思われる。

### 6-2 作成した試案の形での活用

東井義雄のいのちの言葉から、活用できそうな試案を作成する。試案の検証としては、授業者である教員と、授業を受ける児童・生徒で検証することが適切であろう。しかし、本研究はまだ試案の段階である。試案を検証する段階では、児童・生徒の視点として、数年前まで児童・生徒であった大学生の意見は、参考になると考えた。児童・生徒より理解力のある大学生が理解できないので

あれば、それ以上を児童・生徒には期待できないからである。また、教師の視点として、教員免許状の取得を目指す大学生を対象とした。教師を目指し専門科目の勉強を重ねており、教師の視点もある程度理解できると思われる。大学生が気付くのであれば、プロである教師は当然気付くと思われる。大学生による試案の検証でも、参考になると考えた。

研究の次の段階では、授業に直接関わる教師と児童・生徒による検証を実施したい。

### (1) H大学における調査

筆者が非常勤講師をしていたH大学において、『教育課程論』のカリキュラム・マネジメントの実践例として東井義雄をとりあげた。授業のリフレクションペーパーとして、東井義雄の言葉を取りあげた。簡単に内容を説明して、履修している学生に対して質問紙調査を実施した。なお、H大学は2単位15時間扱いだが、本学は1単位8時間扱いのため、H大学では取り上げることができたが、本学ではこの授業は実施できなかった。なお、アンケート結果に関しては、H大学の倫理規定に則っているかどうかに関して担当教員に確認していただき、2021年6月17日に、教務課の担当者から掲載の承諾の通知を得ている。

#### ① 実施時期

2020年1月10日（金）

② 調査対象 H大学 教職科目『教育課程論』を受講している3・4年生 4クラス 合計約450名

#### ③ 調査方法

授業のリフレクションペーパーとして、5件法で質問した。

5:たいへん素晴らしい・大いに賛成、4:素晴らしい・賛成、3:普通・どちらでもない、2:あまり素晴らしくない・やや同意できない、1:素晴らしくない・同意できない

提示の仕方は、授業内容をパワーポイントで作成し、東井の色紙の画像を示した。東井の言葉について、簡単なエピソードを説明した。先入観を持たないように、それほど長くは説明せず、1つの言葉に対して2～3分程度説明した。口頭で、

自分が受ける印象でも、道徳の教材として活用して教える立場からの記述でもよいと説明を付け加えた。各問2～3分間の記入の時間を設けた。

#### ④ 質問項目

候補にあげたのは、以下の10の言葉であった。これらの言葉は、米田・西村の著書からではなく、東井のすべての著書から筆者が抜粋した。これらの言葉は、東井のいのちの教育の言葉としてたびたびとりあげられている。また、東井義雄記念館のHPに色紙の形で掲示されている言葉でもある。学生に具体的に提示しやすいように、東井が色紙に書いて残した言葉から選んだ。そして、色紙の文字も提示した。それらを、筆者が、重要と思った順に配列した。

- 一番はもちろん尊い しかし 一番よりも尊い  
ビリだってある<sup>17)</sup>
- ほんものは続く 続けるとほんものになる<sup>18)</sup>
- 太陽は夜が明けるのを待って昇るのではない  
太陽が昇るから夜が明けるのだ<sup>19)</sup>
- 自分は自分の主人公 世界でただひとりの自分  
をつくっていく責任者<sup>20)</sup>
- 苦しみも悲しみも自分の荷は自分で背負って歩  
きぬかせてもらうわたしの人生だから<sup>21)</sup>
- 雨の日には雨の日の老の日には老の日のおめぐ  
み<sup>22)</sup>
- めぐり逢いの不思議に手をあわせよう<sup>23)</sup>
- 根を養えば 樹はおのずから育つ<sup>24)</sup>
- 見えないところで見えないものが見えること  
ろでささえ生かし養いあらしめている<sup>25)</sup>
- この不思議ないのち それを今生きさせても  
らっている<sup>26)</sup>

#### ⑤ 調査結果（量的調査）

- 一番はもちろん尊い しかし 一番よりも尊い  
ビリだってある

合計 人数	5	4	3	2	1	平均値
434	254	131	38	11	0	4.447
%	58.5	30.2	8.8	2.5	0	

## ●ほんものは続く 続けるとほんものになる

合計 人数	5	4	3	2	1	平均値
432	220	148	52	10	2	4.329
%	50.9	34.3	12.0	2.3	0.5	

●太陽は夜が明けるのを待って昇るのではない  
太陽が昇るから夜が明けるのだ

合計 人数	5	4	3	2	1	平均値
438	175	123	99	34	7	3.970
%	39.9	28.1	22.6	7.8	1.6	

●自分は自分の主人公 世界でただひとりの自分  
をつくっていく責任者

合計 人数	5	4	3	2	1	平均値
432	232	149	48	3	0	4.412
%	53.7	34.5	11.1	0.7	0	

●苦しみも悲しみも自分の荷は自分で背負って歩  
きぬかせてもらうわたしの人生だから

合計 人数	5	4	3	2	1	平均値
431	166	155	82	25	3	4.058
%	38.5	36.0	19.0	5.8	0.7	

●雨の日には雨の日の老の日には老の日のおめぐ  
み

合計 人数	5	4	3	2	1	平均値
432	147	158	90	30	7	3.944
%	34.0	36.6	20.8	7.0	1.6	

## ●めぐり逢いの不思議に手をあわせよう

合計 人数	5	4	3	2	1	平均値
443	224	141	58	13	7	4.269
%	50.6	31.8	13.1	2.9	1.6	

## ●根を養えば 樹はおのずから育つ

合計 人数	5	4	3	2	1	平均値
438	231	164	38	5	0	4.418
%	52.7	37.5	8.7	1.1	0	

●見えないところで見えないものが 見えること  
ろでさえ生かし養いあらしめている

合計 人数	5	4	3	2	1	平均値
429	224	140	56	7	2	4.345
%	52.2	32.6	13.1	1.6	0.5	

●この不思議ないのち それを今生きさせても  
らっている

合計 人数	5	4	3	2	1	平均値
421	240	125	42	10	4	4.394
%	57.0	29.7	10.0	2.4	0.9	

以上のように、5と4で8割をこえ、平均値が4以上の場合が多かった。量的調査としては、東井の言葉の有効性が一定程度認められたと捉えることができる。

しかし、配慮すべき点は、授業のリフレクシオンペーパーとして記入・回収した点である。学生に対して、授業者である筆者の存在が、見えない圧力と捉えられ、回答にバイアスがかかった可能性はある。5と4の選択者が多かったことに影響があったと考えられる。その割合は不明だが、一定程度あったと考えるのが妥当であろう。

## ⑥調査結果（質的調査・・・理由）

それぞれの理由について、具体的に記述してもらったので、その中から抜粋する。

量的調査の分布から明らかなように、5や4が大部分であり、量的調査としては、東井の言葉の有効性があると捉えられると考えられる。5と4で9割をこえる場合もあり、東井の言葉のよさや、道徳の授業での有効性は十分に認められたと考えられる。それでも2や1と回答した例を検討することに意味がある。5からの抜粋と改善のために2と1の回答を検討する。抜粋の基準は、典型的な回答を抜粋し、類型をカバーできるよう配慮した。

なお、5◎4○3□2△1△と表示する。

●一番はもちろん尊い しかし 一番よりも尊い  
ビリだつてある

5◎すごく胸に響いた。必ずしも1番になれなくてもそれまでの過程が大切で、認めてあげるこ

- とが大切だから、私も教師になれたら、この言葉を子どもたちに伝えられたらなと思った。
- 5◎私が教員として一番子どもに伝えたい、努力の大切さと似ている言葉のように感じた。たとえビリでも、その頑張った過程が尊いのだと訴えている言葉だと感じた。
- 5◎努力をせずに1番になることより、たくさん努力した上でのビリの方が価値があると私は思うので、プロセスを大切にできるのはとても素晴らしいと思った。
- 2△一番になるためには多くの努力をしよう。だから、一番が一番尊いものでなければならないと思う。
- 2△尊いビリの意味がよく理解できない。1番じゃなくてもそれでも良いのだという意味なのか？失敗を恐れるなという思いが伝わる。
- ほんものは続く 続けるとほんものになる
- 5◎ゴールを追い求めては、また新しいゴールを見つけ、追い求めるというサイクルが生きていく上で必要であり、教育でも同じことが言えると思ったから。
- 5◎部活動でこの言葉を言われたことがある。「継続は力なり」という言葉もあるが、続けることは大切だと思った。
- 5◎以前どこかで、「貫き通せば誠になる」という言葉を聞いたことがあり、その言葉が好きだったが、その言葉に似ていると思った。
- 2△意味がよくわからなかった。
- 太陽は夜が明けるのを待つて昇るのではない  
太陽が昇るから夜が明けるのだ
- 5◎限られた時間の中で環境やまわりが変わるのを待つては何も起こらない。自分から行動して失敗しても自分自身で変わることだと思った。
- 5◎太陽を自分ととらえて、周囲がどうかしてくれるのを待つていてだけではなく、自分からアクションを起こさなければいけないだと背中を押してくれているように感じる。
- 5◎主体性をもって働きかけることの大切さを「太陽」という象徴的なものを用いて表していることから、一種の詩的センスを感じ取った。
- 2△夜＝悪ととらえるのは違うと思う。夜には夜の素晴らしさがる。
- 2△詩人すぎて何を言いたいのかよくわからない。哲学的な事をおっしゃるんだと思った。
- 2△あまり小・中学生には響かなそう。解説するのも難しい。
- 自分は自分の主人公 世界でただひとりの自分をつくっていく責任者
- 5◎他の人と比べて生きていくより、自分を貫き自分の世界の楽しみ方を見つけ、生きていくことが人を傷つけてしまったり、死に追いやってしまったりすることの防止につながるよい言葉だと思った。
- 5◎周りのせいにするのは簡単です。しかし、周りのせいにするのではなく、自分自身の道は自分で作って行かなければならないと感じたからです。自分の世界は自分で決めて行かなければならないと思いました。
- 5◎世界に存在している限り自分の言動に責任をもてということだと感じました。自分で世界を開拓していかなければならない。自分で自分の住む環境を作っていかなければならないということだと思った。
- 2△自分をつくっていくのは自分だし、主人公でもある。ただ、周りの刺激がなければ、人は変化していかないのではどうか。
- 苦しみも悲しみも自分の荷は自分で背負って歩きぬかせてもらうわたしの人生だから
- 5◎植物状態になった息子も自分の一部である、と言っているように感じた。自分の子どもがそうだったら、私はそのような強い気持ちを抱けるだろうか、その生き方をとても尊敬した。
- 5◎波瀾万丈な人生を送った東井の言葉であるから心に響くものがある。苦しみ、悲しみもすべて受け入れて生きる、かっこいい生き方であると思った。
- 4○私も高校時代にずっと辛く苦しい経験をしてきたが、それを含めて私自身であると思っている。人生楽しいことばかりではないが、それも

大事な経験の一つだと思う。

- 2△その通りであると思うが、苦しみも悲しみも嬉しさも楽しさも自分だけで背負うのではなく、皆で分けあい支え合っていきたいと私は思った。私の人生は、他人の人生にも影響を与えるからである。
- 2△これを大人に言うならよいかもわからないが、小学生にとっては、これからの未来への不安に感じてしまうのではないかと感じた。
- 2△自分一人で背負うという感じがして微妙だと思った。悲しみや苦しみは、皆と共有して少しでも元気に楽しく人生を生きることが大切だと思った。

●雨の日には雨の日の 老の日には老の日のおめぐみ

- 5◎雨も老もマイナスのように考えてしまいがちですが、見方を変えて農家の人にとっては恵みであるというように、視点を変えることでプラスに捉えることができるという頑張る力を与えてくれる言葉です。
- 5◎どんな状況でもいかに前向きにとらえられるかを伝えた言葉。フレデリック・ラングブリッジの「二人の囚人が鉄格子から外を眺めた。一人は泥を見た。一人は星を見た。」という言葉思い出した。
- 5◎人生同じ時はなく、日々変化があるが、その中にも幸せがあることと納得した。
- 2△私にはあまり響かなかった。年齢を重ね、この句が響く日が来るのだろうか。
- 2△雨の日がうれしい学校生活ではなかった。雨の日の自転車登校は苦。
- 2△なぜ雨と老を取り上げたか不思議に思った。お恵みの意味を考えるのが少し難しいと思った。

●めぐり逢いの不思議に手をあわせよう

- 5◎「一期一会」という言葉があるように、めぐりあいという大切な時間をこれから子どもたちには伝えていきたい。私もめぐりあいで多くのことに出会い、多くのことを経験したから。
- 5◎これを見たとき小田和正の「ラブストーリー

は突然に」という歌の歌詞が浮かんだ。恋愛だけに限らず、出会えたことであらゆることが可能になったりしていることに気付いて、その喜びを分かち合えたら幸せだなと思った。

- 5◎自分自身、小さい頃から人間関係をうまくつくることができず、一人であることばかりでした。しかし、人との関わりをなくすことなく、どうにかして克服しようとしたら、大学生になって、様々な人と出会うことができた。今は、一人一人との出会いに感謝しているので、非常に共感できる部分があった。
- 2△不思議に手をあわせるという感覚が、不思議な感じ。めぐりあった相手にではなく、仏様に感謝するのが当時は当たり前だったのだろうか、と疑問に思う。
- 2△私は、人生における偶然は必然であると考えているので、新たな物や人とのめぐり合いがあったということは、自分のストーリーの中の一部にすぎず、自分の力で引き起こしたものだと思うから。
- 2△めぐりあいを不思議だと思ったことがないのでこの考えはわからなかった。

●根を養えば 樹はおのずから育つ

- 5◎相田みつをの詩でも私も同じようなものを見ました。人も根が悪いと悪い方向に行ってしまう。小学校はベースを育てる場所。よい根を育てて行きたいと思った。
- 5◎教師にあてはまる言葉だと思いました。教師も生徒の根本的な部分を大切に育てて、大きくしていくので共感できました。見えないところに目を向けたいです。
- 5◎勉強でもスポーツでも、基本が大切で、土台をしっかりとつくらなければ、崩れてしまう。初心を忘れず、謙虚な心をもって過ごすことが大切である。
- 2△普通のことを言っているふう感じた。あまり共感できなかった。
- 見えないところで見えないものが見えるところでささえ生かし養いあらしめている
- 5◎「努力は人様に見せるものではない」と祖母

によく言われていたのを思い出し、見えない努力を見える結果につなげることの喜びと難しさを身をもって知っているから。

- 5◎自分が知らないところで誰かが支えてくれているということも忘れないようにすることが大切だし、見えないところでの努力は自分を救うこともあるから大切。
- 5◎表面に見えているものがすべてではなく、縁の下の力持ちと同じだと考えた。人は誰かに支えられて生きているが、見えていないところで支えてくれている人は少なからずいるのかなと考えさせられた。
- 2△人間は一部しか見えていない生き物だと、マイナスの意味で受け止めてしまった。
- 2△難しくわかりにくい。
- 2△もっとわかりやすい表現をしてほしい。理解があまりできなかった。

●この不思議ないのち それを今生きさせてもらっている

- 5◎自分の命は、自分だけの命なのではなく、多くのつながりの中で生きていということを感じることができた。自分の命は大切に生きていこうと思える、前向きなメッセージであると思った。
- 5◎いのちの大切さ、尊さを感じる言葉であり、頂きたいのちを無駄にせず、毎日精一杯生きていこうと思った。
- 5◎「命の大切さ」を伝えている言葉だと思った。いじめ、暴力を許さず、命の尊さを伝えていける教師になりたいと思った。
- 2△生きさせてもらっているという感覚があまりないので、響かなかった。
- 2△なぜいのちを不思議と表現したのか、わからなかった。
- 2△生きさせてもらっているという受動的な表現が不思議だなと思いました。

## ⑦ 考察

まず、授業のリフレクションペーパーということで、授業者の意図を忖度したり、バイアスがかっていたりすることが想定できる。その割合が

どれくらいかわからないが、数字をそのまま信じるだけではなく、バイアスがかかった数字であろうということを認識して分析したい。また、理由の記述から活用上の配慮を明らかにしたい。

●一番はもちろん尊い しかし 一番よりも尊い  
ビリだっている

平均値が、4.447であり、5が58.5%、4が30.2%、5と4の合計は、88.7%であり、かなり共感されている。

一方、共感できないという理由は、一番をとるにはそれなりの努力をするのだから、一番のほうが尊いという考えがある。特に、運動部の学生にはそう思えることは、理解できる。

活用上の配慮は、ビリを賞賛し、1番をめぐす努力を軽視している言葉という誤解がないように十分に説明する必要がある。1番をめぐすことは賞賛されるべきであり、ベストを尽くすことは意味があることを理解させたい。

●ほんものは続く 続けるとほんものになる

平均値は、4.329であり、5が50.9%、4が34.3%、5と4の合計は、85.2%であり、かなり共感されている。

一方、共感できないという理由の中には、最初から本物でなければ続かないのであれば続けた先の本物とはいったい何というような、記述の論理性の矛盾をつくような指摘があった。

活用上の配慮は、論理の矛盾と思われることを説明する。ほんものだから続けられたことと、続けたからほんものになったことは、論理的にたてにつながる関係ではなく、横に並ぶ関係であることを説明する。

●太陽は夜が明けるのを待って昇るのではない  
太陽が昇るから夜が明けるのだ

平均値は、3.970であり、5が39.9%、4が28.1%、5と4の合計は、68.0%であり、全体としては多いと思われるが、他の言葉と比較すると、やや共感が少ない。

一方、共感できないという理由の中には、当然のことだとか、何を訴えたいのかわからないとい

うことが言われている。また、教育的な意味があるかわからないとも指摘している。

活用上の配慮は、理科的な知識として考えるのではないことを理解させる。天体の当たり前のことを言っているとしか理解されないことにならないようにする。この太陽は、「希望」ととらえることができることを説明する。

●自分は自分の主人公 世界でただひとりの自分をつくっていく責任者

平均値は、4.412であり、5が53.7%、4が34.5%、5と4の合計は、88.2%であり、かなり共感されている。

一方、主人公であるが、周りの刺激がなければ、人は変化していかないのではどうか、という疑問を抱く学生がいた。

活用上の配慮は、周囲との関係には言及していないが、周囲との関係を築きながらの話であることを説明する。独りよがりな視点や、孤独な人の視点ではなく、集団生活の中での言葉であることを理解させる。

●苦しみも悲しみも自分の荷は自分で背負って歩きぬかせてもらう わたしの人生だから

平均値は、4.058であり、5が38.5%、4が36.0%、5と4の合計は、74.5%であり、共感されている。

一方、苦しみも悲しみも嬉しさも楽しさも自分だけで背負うのではなく、皆で分けあい支え合っていきたい、という意見が多かった。自分一人で抱え込むよりも、誰かと支え合っていきたいと思うことは、学生らしくてよいと思われる。

活用上の配慮は、責任を一人で背負うことや誰かに相談して助けを求めることを否定しているわけではなく、皆と支え合うことは否定していないことを説明する。逆に、責任転嫁など他者のせいにするにならないようにという意味であることを説明する。

●雨の日には雨の日の 老の日には老の日のおめぐみ

平均値は、3.944であり、5が34.0%、4が36.6%、5と4の合計は、70.6%であった。おおむね共感

されているが、平均値が4を下回るので、他の設問よりは割合が低い。また、5より4の方が多いのは他にない特徴であり、統計的にはこれが普通なのだが、リフレクションペーパーというバイアスがかかっているにもかかわらずこの数値であるということは、他の設問よりは共感薄いことは確かであると思われる。

一方、学生は若いので、自分の今までの人生で、雨に恵みを感じたことがほとんど思い浮かばなかった、雨の日がうれしい学校生活ではなく、雨の日の自転車登校は苦であった、という意見があった。

活用上の配慮は、学生には、雨が恵みの雨である一面について理解させる。雨は、農家にとって恵みの雨である。天気予報では、良い天気=晴れというわけではないので、晴れを良い天気と言わないようにしているというお天気キャスターの話をすることも重要であろう。

●めぐり逢いの不思議に手をあわせよう

平均値は、4.269であり、5が50.6%、4が31.8%、5と4の合計が82.4%であった。5が、50%以上あることから、かなり共感を得たと思われる。

一方、めぐりあいを不思議だと思ったことがないのでこの考えはわからない、不思議に手をあわせるという感覚が、不思議な感じ。めぐりあった相手にではなく、仏様に感謝するのが当時は当たり前だったのだろうかと思いに思ふ、いろんな人に会えることに感謝したいとは、友達などいない人には酷だと思ふ、という意見があった。

活用上の配慮は、手を合わせようは、感謝することを意味していることを理解させる。巡り会いや出会いは、偶然性が大きいので、不思議と表現したことを理解させる。

●根を養えば 樹はおのずから育つ

平均値は、4.418であり、5が52.7%、4が37.5%、5と4の合計が、90.2%であった。5が半分以上であり、5と4で9割以上なので、よく共感を得たと思われる。

一方、普通のことを言っているように感じた。あまり共感できなかつた、という意見もあった。

活用上の配慮は、普通と言えば普通の文だが、樹と根の植物の話に終わらせることなく、人間の話につなげることが肝要だと思われる。

●見えないところで見えないものが 見えるところで ささえ生かし養いあらしめている

平均値は、4.345であり、5が52.2%、4が32.6%、5と4の合計が、84.8%であった。5が半分以上であり、5と4の合計が8割を超えているので、よく共感を得たと考えられる。

一方、人間は一部しか見えていない生き物だと、マイナスの意味で受け止めてしまった、難しくわかりにくい、という意見があった。たしかに「あらしめている」の表現は、小・中学生には分かりにくいと思われる。

活用上の配慮は、「あらしめている」は難しい表現であるから現代語訳などの説明が必要である。

●この不思議ないのち それを今生きさせてもらっている

平均値は、4.394であり、5が57.0%、4が29.7%、5と4の合計が、86.7%であった。5の割合が半分以上であり、特に高く、共感できたようである。

一方で、生きさせてもらっているという感覚があまりないので響かなかつた、生きさせてもらっているという受動的な表現が不思議だ、と感じたようである。

活用上の配慮は、生きさせてもらっているのは、仏様のおかげ、感謝の気持ちということを理解させる。仏様でも神様でも同様で、感謝の気持ちの表現であることを理解させる。

## ⑧ 試案の修正

質問紙調査の結果を反映させることで、試案を修正する。大学生が受けた第一印象は、大きな影響があると思われる。それは、小・中学生の道徳の授業で、活用する場合に参考になる。平均値の順に再整理を行う。もちろん、東井の言葉の価値をランクづけるものではなく、わかりやすさの順程度にとらえるべきだろう。

順位	東井のいのちの言葉	平均値
1	一番はもちろん尊い しかし 一番よりも尊いビリだってある	4.447
2	根を養えば 樹はおのずから育つ	4.418
3	自分は自分の主人公 世界でただひとりの自分をつくっていく責任者	4.412
4	この不思議ないのち それを今生きさせてもらっている	4.394
5	見えないところで見えないものが 見えるところで ささえ 生かし 養い あらしめている	4.345
6	ほんものは続く 続けるとほんものになる	4.329
7	めぐり逢いの不思議に手をあわせよう	4.269
8	苦しみも悲しみも自分の荷は自分で背負って歩きぬかせてもらうわたしの人生だから	4.058
9	太陽は夜が明けるのを待って昇るのではない 太陽が昇るから夜が明けるのだ	3.970
10	雨の日には雨の日の 老の日には老の日のおめぐみ	3.944

この結果の活用を考える。まず、東井の言葉の活用の機会が限られるのであれば、上位の言葉から活用するというような改善が考えられる。一方で、東井の言葉の価値の調査ではないので、下位の言葉でも、説明を丁寧にすることで活用することが出来る。そして、否定的な意見を事前に想定して、活用上の配慮で例示したように、説明に生かし、誤解を防ぐように努めることが重要である。

## (2) 東京家政学院大学における調査

筆者が勤務する東京家政学院大学において、『教育課程論』の授業において、カリキュラム・マネジメントの実践例として東井義雄をとりあげた。遠隔授業で実施し、授業のリフレクションペーパーとして、東井義雄の言葉を取りあげた。Youtube で簡単に説明して、学生の印象について質問紙調査を実施した。なお、本学の1単位8時間扱いであるが、シラバスを見直し、最終回を工夫することでこの授業を実施した。

### ① 実施時期

2020年 7月28日 (火) 39名

2020年 11月23日 (月) 21名 祝日授業

- ② 調査対象 東京家政学院大学 教職科目『教育課程論』を受講している2年生 合計 60名

人数が少ないので、前期と後期という授業の時期は違うが、どちらも遠隔授業ということで条件は同じなので、合算して分析する。

- ③ 調査方法

授業の課題として、5件法で質問した。

5:たいへん素晴らしい・大いに賛成、4:素晴らしい・賛成、3:普通・どちらでもない、2:あまり素晴らしくない・やや同意できない、1:素晴らしくない・同意できない

提示の仕方は、授業内容を Youtube で作成し、東井の言葉を口頭で説明した。東井の言葉について、簡単なエピソードを説明した。それぞれの言葉に対して1分程度説明した。オンデマンド型授業のため、再生時間に制限があり、自分が受ける印象でも教える立場からの記述でもよいことについては、説明は十分ではなかった。記入は授業の課題とした。理由は、重複するので省略する。

- ④ 質問項目

H大学の場合と全く同じ10の言葉であり、順序も同じである。

調査結果 (量的調査)

- 一番はもちろん尊い しかし 一番よりも尊い  
どりだってある

合計人数	5	4	3	2	1	平均値
60	25	20	11	4	0	4.100
%	41.7	33.3	18.3	6.7	0	

- ほんものは続く 続けるとほんものになる

合計人数	5	4	3	2	1	平均値
60	18	26	12	3	1	3.950
%	30.0	43.3	20.0	5.0	1.7	

- 太陽は夜が明けるのを待つて昇るのではない  
太陽が昇るから夜が明けるのだ

合計人数	5	4	3	2	1	平均値
60	12	23	18	7	0	3.667
%	20.0	38.3	30.0	11.7	0	

- 自分は自分の主人公 世界でただひとりの自分  
をつくっていく責任者

合計人数	5	4	3	2	1	平均値
60	34	16	10	0	0	4.400
%	56.7	26.7	16.6	0	0	

- 苦しみも悲しみも自分の荷は自分で背負って歩  
きぬかせてもらうわたしの人生だから

合計人数	5	4	3	2	1	平均値
60	18	26	12	3	1	3.950
%	30.0	43.3	20.0	5.0	1.7	

- 雨の日には雨の日の老の日には老の日のおめぐ  
み

合計人数	5	4	3	2	1	平均値
60	6	15	24	13	2	3.167
%	10.0	25.0	40.0	21.7	3.3	

- めぐり逢いの不思議に手をあわせよう

合計人数	5	4	3	2	1	平均値
59	22	20	15	2	0	4.051
%	37.3	33.9	25.4	3.4	0	

- 根を養えば 樹はおのずから育つ

合計人数	5	4	3	2	1	平均値
59	20	24	14	1	0	4.068
%	33.9	40.7	23.7	1.7	0	

- 見えないところで見えないものが 見えること  
ろで ささえ生かし養いあらしめている

合計人数	5	4	3	2	1	平均値
60	12	21	15	8	4	3.483
%	20.0	35.0	25.0	13.3	6.7	

- この不思議ないのち それを今生きさせても  
らっている

合計人数	5	4	3	2	1	平均値
60	21	24	11	3	1	4.017
%	35.0	40.0	18.3	5.0	1.7	

## (3) H大学と東京家政学院大学との比較

いのちの言葉 (略)	順位	H大学 平均値	順位	T大学 平均値	差 (H-T)
一番はもち	1	4.447	2	4.100	0.347
根を養えば	2	4.418	3	4.068	0.350
自分は自分	3	4.412	1	4.400	0.012
この不思議	4	4.394	5	4.017	0.377
見えないと	5	4.345	9	3.483	0.862
ほんものは	6	4.329	6	3.950	0.379
めぐり逢い	7	4.269	4	4.051	0.218
苦しみも悲	8	4.058	6	3.950	0.108
太陽は夜が	9	3.970	8	3.667	0.303
雨の日には	10	3.944	10	3.167	0.777

すべての項目で、H大学より東京家政学院大学が下回った。異なる大学、異なる年度であるので、多少の増減があるのが普通であると考え、明らかに何らかの要因があると考えられる。注目すべきは、対面授業と遠隔授業の差ではないかと推測する。対面授業では、教員が、その言葉の説明やエピソードを直接伝えることができる。また、遠隔でも対面と全く同じ授業をしたとしても、教員の存在は遠い。対面では、同じ教室に教員がいる。熱が伝わるという面が考えられる。遠隔では、教員との距離が遠く、教員の影響が低くなると思われる。これは逆に言えば、遠隔授業の場合、教員の影響が低くなり、言葉の印象の善し悪しを学生が純粹に考えることができたと言える。どちらがよいかは判断が難しいが、言葉の印象は、遠隔授業での印象の方が対面授業の印象より低かったことは確かであった。

共通点は、上位4つはほぼ同じであるということである。児童・生徒にいのちの言葉を提示する場合は、上位4つとすれば、児童・生徒にとって理解しやすいと思われる。

しかし一方で、東井のいのちの言葉について、その道徳的な価値については、今回はすべての言葉に価値があるという前提だった。心にささるか、理解しやすいかなど、活用のしやすさについて調査した。10の言葉のうち、例え下位になったとしても、道徳的な価値が劣る訳ではない。下位の言葉の活用に当たっては、児童・生徒が誤解しないように、適切な説明が必要になるとと思われる。

## 7. まとめ

## 7-1 成果

そもそも「特別の教科道徳」は、カリキュラム上の妥当性はあるのか。折出によれば、「特別の教科道徳」は、非学問的だという。本論で検討したように、カリキュラム上の理論的な妥当性は少なく、いじめ問題の解決の方策の一つとして、道徳の時間に重きを置くこととなり、「特別の教科道徳」として教科化されたことが分かった。

生活綴方における東井の助言は、愛情や寛容さにあふれており、生きている人間、子どもにとって、救いの言葉になったと思われる。東井の言葉がもつ愛情や寛容さは、今後の道徳教育に示唆を与えている。

東井のいのちの言葉を活用する候補となる言葉に対して、大学生に質問紙調査を実施した。授業のリフレクションペーパーということで、授業者である筆者への賛成意見のバイアスがかかっているかもしれないが、それを差し引いても、おおむね好意的に受け止められていた。共感できなかったという意見は貴重であり、小・中学生に活用する場合の参考になる。それは、大学生がわかりづらいと指摘している部分は、小・中学生にはもっと分かりづらいと考えられるので、いっそう丁寧に説明するという対応が考えられる。

質問紙調査を2年間にわたり実施したことにより、通常の対面授業の他に、遠隔授業でも同様の授業を実施することになった。対面授業は、教師の意図する内容が伝わりやすいが、よい意味でも悪い意味でも教師の影響が大きい。一方、遠隔授業は、学生が自ら情報を取りに行かなければならず、教師の意図した内容がやや伝わりにくい面があるが、悪い影響も少なくなるというよい面もある。

## 7-2 課題

「特別の教科道徳」の特色の一つは、検定教科書の使用である<sup>27)</sup>。教師が、教科書「を」教えるのにとどまれば、他の教材は扱われないであろう。教科書「で」教える教師であれば、教科書以外の資料から広くとりあげることは可能である。道徳教育は、他の教科指導と同じように、教科書を読

んで、建前である理想的な答えや対応法を発表するだけなら、深い学びではない。建前ではなく、子どもの本音を語らせ、話し合い、深める時間になってこそ、生き方にかかわる充実した時間となる。

「特別の教科道徳」では、教科であるから評価を行う。5段階評定ではなく所見で記述するが、子どもの道徳性・人間性を評価することには変わりはない。もし、東井が生存していたら、そもそも生き方の教育、道徳教育に評価はふさわしくないと言うであろう、と推測する。たとえ、評価するとしても、所見では子どもの良いところをほめて認めるということになると思われる。東井の精神を継承し、「特別の教科道徳」の評価の在り方について考えることが重要となる。

「特別の教科道徳」がかかえる様々な現状を考えると、東井のいのちの言葉の活用には様々な課題がある。東井が生きた時代と現代は、子どもの生活環境が大きく異なる。この環境の変化を考慮した対応をすることで、東井のいのちの言葉の活用は可能となる。

今回、大学生への質問紙調査を行い、小・中学生に話をする際の、貴重な結果を得ることができた。大人である教師が受ける言葉の印象と、大学生の受ける印象には違いがあると思われる。それでも、大学生と小・中学生でもまだ乖離があると思われる。その溝を埋めることは教師の力量であり、教材開発における重要なところである。実際に教師や児童・生徒に活用してもらうことが、まさに今後の課題である。

また、東井のいのちの言葉の主旨が正しく伝わることが重要である。また、東井の言葉は東井自身の背景があって発せられたものであり、東井のいのちの言葉の背景を理解しないまま使用することには問題がある。東井のいのちの言葉の背景を正しく理解してから使用するのには教師の役割である。それでも、子どもがそれを正しく受け止められるとは限らない。東井のいのちの言葉を引用して使用する場合には、細心の配慮が必要となる。

細心の注意とは、具体的には、

- ①東井の言葉の主旨が正しく伝わっているか。
- ②東井の言葉の背景を、正しく理解しているか。

等に配慮することが必要である。

今回の調査は、東井のいのちの言葉は、すべて道徳的な価値があることを前提とした。質問紙調査の結果によって東井の言葉の価値を調査したわけではない。印象に残りわかりやすいことで活用しやすいか、丁寧な説明を必要とするか、など活用上の配慮を明らかにすることができる考えた。東井のいのちの言葉の価値に関する研究は、今後の課題である。

今回は、質問紙調査を2年間にわたり実施したことにより、通常の対面授業の他に、遠隔授業でも同様の授業を実施することになった。授業方法の違いにより、学生の感想に影響を与えたと考えられる調査結果となった。対面授業では、言葉の意味と、東井がその言葉を発した背景について、簡単な説明をすることができた。しかし、遠隔授業では、学生のwifi等の環境の関係で時間的な制約があり、そこまで丁寧な説明は叶わなかった。

今後の対応は、2通りの場合が考えられる。

対面授業のように丁寧に説明する場合、学生に言葉の意味が正しく伝わる反面、教師からのバイアスがかかり、質問紙調査に多少の影響を与えることになる。一方で、遠隔授業でも、対面と変わらない丁寧な説明を心掛ける場合であれば、学生に言葉の意味を正しく伝えられるのに加え、教室という同じ空間に教員がいないことにより、教師からのバイアスは小さく抑えることができる。

どちらの場合が、正しい調査結果が得られるかについて、今後の研究課題である。

## 引用・参考文献

- 1) 東井義雄著、米田啓祐・西村徹編『東井義雄一日一言 いのちの言葉』致知出版社 2007年
- 2) 豊田ひさき『東井義雄の授業づくり—生活綴方的教育方法とESD』風媒社 2016年
- 3) 豊田ひさき『東井義雄 子どもをつまづきは教師のつまづき—主体的・対話的で深い学びの授業づくり』風媒社 2018年
- 4) 東井義雄「生活綴方と道徳教育」『東井義雄著作集3』明治図書 1972年 pp.103-106
- 5) 東井義雄「道徳教育と教師」『東井義雄著作集7』明治図書 1973年 p227

- 6) 齋藤義雄「東井義雄の「つまずき」を生かしたカリキュラムマネジメントーブルームの完全習得学習(マスタリーラーニング)と比較して」『東京家政学院大学紀要』第58号 2018年
- 7) 齋藤義雄「東井義雄の「つまずき」を生かす指導法の研究—齋藤喜博の「つまずき」への対応と比較して」『現代児童学研究』第1巻第1号 現代児童学研究会 2018年
- 8) 齋藤義雄「東井義雄の「教科の論理」における指導法に関する研究—主体的・対話的で深い学びの観点から」『東京家政学院大学紀要』第59号 2019年
- 9) 齋藤義雄「東井義雄における野外文化教育の指導に関する研究—主体的・対話的で深い学びの観点から—」『野外文化教育』野外文化教育学会紀要第17号 2019年
- 10) 齋藤義雄「反省的实践家 東井義雄」齋藤義雄『教職概論—理想の教師像を求めて—』大学図書出版 2020年 pp.192-201
- 11) 学習指導要領「特別の教科 道徳」文部科学省 pp.165-172
- 12) 折出健二「戦後教育と道徳の「特別教科」化」『教育のグローバル化と道徳の「特別の教科」化』日本教育方法学会 図書文化 2015年 pp.52-65
- 13) 菊地真貴子「求められる教師の資質 道徳教育」齋藤義雄『教職概論—理想の教師像を求めて—』大学図書出版 2020年 pp.56-65
- 14) 前掲書 11) pp.5-9
- 15) 東井義雄『東井義雄「こころ」の教え』佼成出版社 2003年 pp.14-16
- 16) 前掲書 15) pp.107-109
- 17) 東井義雄『10代の君たちへ 自分を育てるのは自分』致知出版 2008年 pp.18-24
- 18) 東井義雄『子どもの心に光を灯す』致知出版社 2013年 p104
- 19) 前掲書 17) p73
- 20) 東井義雄『いのちの教育2』白もくれんの会 2017年 p8
- 21) 東井義雄『いのちの教育1』白もくれんの会 2017年 p19
- 22) 東井義雄『おかげさまのどまんなか』佼成出版社 1994年 p17
- 23) 同上書 p39
- 24) 東井義雄記念館ホームページ  
<https://toui-yoshio.org/touikotoba> (2021.3.21 閲覧)  
東井義雄の自筆色紙は存在する。ただし、東井義雄のオリジナルの言葉かどうかは疑問が残るものはある。仏教詩人である坂村真民の「めぐりあい」の詩の一節にも出てくる。  
仏教ではすでに以前から言われている言葉かもしれない。坂村真民『めぐりあいのふしぎ』サンマーク出版 2009年(旧版『生きてゆく力がなくなるとき』柏樹社 1981年)
- 25) 東井義雄『どの子も子どもは星』白もくれんの会 2017年 p49
- 26) 前掲書 22) p69
- 27) 山崎雄介「道徳の「特別教科」化と学校教育の課題」『教育のグローバル化と道徳の「特別の教科」化』日本教育方法学会 図書文化 2015年 pp.66-79  
(受付 2021.3.25 受理 2021.7.17)